

がらくた小部屋

東雲咲夜

「私だけ見ていて欲しいのです」

あなたは歌うようにいって、この二つの眼を抉りました。

どうしてなのかと、尋ねたこともありました。

あなたはただ、優しい声でいうばかりでした。

「私だけを見ていればいい。他の汚れたものなんて、見なくていい」

何度も、耳の側で繰り返されました。

今でも焼きついて離れません。

髪を優しく撫でてくれたこともありました。

大きくて、暖かい手が撫でていたのでしょうか。

もうそれを見ることはできません。

あなたには、この身以外のものが、全て汚れて見えたのでしょうか。

それとも、綺麗なものが汚れて。

汚れたものが綺麗に見えていたのでしょうか。

光を奪われた空洞には、その瞬間のあなたの姿だけが残りました。

とても美しく、微笑む姿だけが。

今のあなたはどんな表情をしているのでしょうか。

何も見えない暗闇の中では、想像するばかりで。

想像は、やがて創造につながりそうになります。

色々な姿をした、あなたを作るのです。

でもそのどれをもが、本当のあなたにはかないませんでした。

そうして想像をくりかえしていくうちに。

本当のあなたのことを忘れてしまいました。

姿形ははっきりと覚えています。焼きついているのですから。

ただ、言葉で説明ができないのです。

きっと、この目を潰してしまうくらいですから……

独占欲の強い、わがままな人だったのでしょうか。

あなたの癖は今でもよく覚えています。

いらつくと、指の関節を勢いよく鳴らすのです。

いつも力を入れすぎて指を折ってしまわないか。

とても心配だったのを覚えています。

あなたは知らなかったのですね。

汚れたものを知っているからこそ、美しいと思えるのです。

比較するべきものを知らなければ、何も感じません。

綺麗なものを見続けていれば、いずれ飽きてしまいます。
この世に生きている、有象無象の人達。
その人達がいるからこそ、あなたは輝いて見えたのです。
だから、記憶の中のあなたしか見えない今は。
ぼんやりと色褪せてしまっているのです。
二人しかいない世界ならば。
あなたは大切だけれど、価値は限りなく薄くなってしまおう。
一人も二人も、同じようなもの。
現物ではなく、記憶の中のあなたの姿。
今では、それが本当に正しいのかすら、わかりません。
確かめるすべもないのですから。
名前を呼べば、返事をしてくれるのでしょうか。
でも知りたいのは声ではなくて、姿。
人の記憶などあやふやなものです。
あなただと信じ込んでいる姿は、まったくの別人なのかもしれません。
そうだとしたら、とてつもなく恐ろしいです。
できることならば、昔に戻りたいのです。
この目が正常で、あなたを見ることができていた日々に。
汚れたものなんて、いくら見えても構わない。
あなたの姿が、ただ恋しいのです。
でも、あなたはもう見えなくなってしまった。

こんな風に思っただけではいけないのでしょうか。
この目だけが光を失ってしまいました。
あなたを見ることはできません。
あなたが何を見ているのかを、知るすべはありません。
もしかしたら、他の人を見ている可能性もあるのです。
ねえ、不公平だとは思いませんか？
あなただけが、見えているなんて。
この目を見えなくする前に、あなたの眼を潰せばよかった。
本当は、そうするのがよかったのです。
二人一緒なら、何の疑問も生まれませんでした。
一度生まれてしまった疑いは、なかなか消えないのです。
そうでなければ、同時に目を潰すのもいいでしょう。
あなたが今何を見ているのか。
それを私は知りたいのです。
だから、あなたに尋ねたのに。

「私が見ているのは、君だけだよ」

あなたの答えは、望んでいたものとは違いました。

それが、当たり前なのでしょう、きっと。

けれど恨めしくなるばかりで。

こんな風に思うのは、わがままなのでしょう。

だとしても、仕方がないと思うのです。

あなたのことを愛しいと思う故の、考えなのですから。

あなたはどう思うのでしょうか。

浅ましいと思いますか。

目障りだと思いますか。

拒絶しますか。

受け入れてくれますか。

どうしても、それが知りたかったのです。

だから、あなたの眼を潰そうとしました。

近くにあった、鋭く尖っているもので。

あなたの気配ならば、よくわかりました。

呼ぶと、近くに来てくれましたから。

手探りで、あなたの体に触れて。

鎖骨をなぞり、首筋を辿り。顔に辿り着いて。

あなたの、二つの眼に狙いを定めて。

力いっぱい、突き刺したのです。

指先に触れるのは、生暖かい感触だけで。

あなたは悲鳴ひとつあげませんでした。

もしかすると、こうなることを知っていたのでしょうか。

その瞬間は、安心しました。

これであなたも同じになったのだと。

でも、いくら呼びかけても何の返事也没有せん。

次第に、不安に支配されていきました。

手探りで辿って、突き刺しました。

それとおぼしき場所に刺しただけなのです。

もしかしたら、違う場所を刺したのかもしれない。

だんだんと、指先から伝わるぬくもりも、冷えてきました。

それでも、増えていく不安を包みこんでいるのは、安心感でした。

だってそうでしょう？

もしも、あなたが死んでしまったのだとしても。

死の直前に見たのは、この姿。
あなたを殺したのも、この手。
他の人に奪われたりするくらいならば——
いっそこの手で殺した方がよかったのかもしれない。
悲しいけれど、満足しています。
殺人者の烙印など、なんの障害にもなりません。
結局は、醜い独占欲に突き動かされたのでしょうか。
けれど、最後まで残念で仕方がないのは。
あなたの姿が見れないことです。
呆然としていますか。
笑っていますか。
泣いていますか。
誰を見ていますか。
見せたくなくて、光を奪ったあなた。
信じられなくて、あなたを殺してしまったこの身。
本当に愚かなのは……
いったいどちらでしょう？

ああ、独占欲とは恐ろしいものです。

Tarantella

ひとりきり、漆黒の闇に包まれる部屋の中で女は踊っていた。
細い月明かりは、窓から微かに差し込む程度で、女を照らすほどではなかった。
暗がりの部屋の中、妖しく響くピアノの音。
流れるように速い旋律は時に酔いしれるほどに、時に不協和音にさえ感じ取れる。

——グリンカのタランテラ。

いくつかあるタランテラの中でも、一番私が好きなもの。
一番……、思い出が残っている曲。
懐かしいような、切ないような。複雑な感情が胸に満ちていく。
それを振り払うかのように、乃亜は舞い踊る。
この部屋はいつもダンスの練習をしているから、部屋には邪魔なものなどない。
プレイヤーから流れ続けるタランテラ。
その中では珍しい、四分の二拍子。旋律に合わせて体を動かすのは心地いい。
そう、私はダンスが好きだもの。
夢中になって踊ることはとても楽しいし、リラックスできる。
それなのに……どうしてこんなに気分がもやもやとしているのかしら。
この曲を一人ではなく二人で踊っていたときのことを思い出してしまうから？
本来、タランテラはペアで踊る場合が多い。基本的には男女のペアで。
乃亜も以前は二人で踊っていた。今は、いい相手がいないだけ。
そう。もう、あの人はいないの。だから、私は一人で踊るのよ。
言い聞かせるように、体を旋律に乗せて踊る。
でも……心は体を離れて、いつかの思い出へと向かう。
愛しい人と踊っていた頃に。

乃亜がその男と出会ったのは、ダンスパーティーの時のことだった。

誰と組もうかとペアを探しているときに誘われたから。

どこかの社長だとかお金持ちとかいう人ではなかったけれど、包容力のある魅力的な男性だった。

久しく男性と付き合っていなかった乃亜にとって、一目惚れするのはあっという間だった。

その人には奥さんがいたのだけれど、なんら問題はなかった。

パーティーでなくとも、一緒に踊ったりもした。

身体を揺らして、足を絡めて。彼の前でドレスを脱いだことは数え切れないくらい。

乃亜は深く深く、彼へと溺れていった。彼もまた同じなのかはわからないけれど。

彼はいくつも甘い言葉を囁いてくれた。何度も、何度も繰り返し。

それがたとえ——期限付きの恋だったとしても。

ひと時の夢でも見られるのならば、それでいいと乃亜は思う。

いくつかの季節が巡って。

乃亜と男は別れた。お互いに、愛が消えてしまったわけではなかった。

けれど、そう長くは続かぬ関係だろうということは、あらかじめわかっていた。

二人とも、納得して別れたのだ。

終わりが来るとわかっていればいるほどに、男への想いは募っていく。

初めから何も知らないほうがよかったのかもしれないと今は思う。

別れてから乃亜は以前よりも、タランテラを踊るようになった。

過去の男を忘れるために、想いを断ち切りたいがために。楽しく踊っているつもりなのに……

軽やかに動いているかのように見える足には、目には見えぬ妄念が絡み付いて離れない。

閉じた瞼の裏には、今も鮮やかに残る、色褪せることのない微笑み。

振り払うように首を激しく振りながら、乃亜は踊り続ける。

蜘蛛に咬まれた毒を抜く為に踊り狂うタランテラ。

何度も何度も踊っているのに……いつまでたっても、毒は残ったままで。

苦しくて切なくて……疲れ果てているのに、踊りをやめられない馬鹿な私。

きっと私は、タランテラに魅せられたまま。

いつだっただろうか。

ぼんやりと霞む頭に、ぽつりと浮かんだ言葉。

「僕が死んだら、食べてよ」

彼が私に、こんな話をしたことがあった。

遠い遠い、いつかの記憶。

「君はさ。愛って、どんな風に終わると思う？」

確か部屋のベッドの上で、私は彼に抱きしめられていた。

彼の部屋は、飾り気のない、白い部屋だった。

いきなり何の話かと思ったが、私は素直に答えた。

「結婚したり、同棲したりして、終わりじゃないの」

出逢って、好きになって、付き合っ

結婚して、子供を産んで。

年老いて、いずれは死にゆく。

男女のどちらか一方が死ねば、愛はそこで終わるんじゃないだろうか。

いくら好きあっても、墓は別々のものとなるから。

私は自分で言うとおきながら、つまらないと感じていた。

そんな、平凡でありきたりな愛なんて。

あってもなくても、まるで同じじゃないの。

けれど、そのつまらないものが、現実で。

終わらない愛なんてあるなら、見てみたいくらいだと思った。

「そう……結婚して終わり？」

「結婚というのが、ひとつの行き先だと思うのよ。死ねば、愛があっても、完結してしまうでしょう」

「完結……か」

彼はぼそりと呟くと、そのまま黙ってしまった。

私は彼が何か言葉を発するまで、黙っていた。

何故なら、彼の俯きがちの顔は、ひどく真剣だったから。

何か、とても大切なことを考えているかのよう

に。私が大人しく彼の鼓動を感じていると、彼は言った。

「確かに、死んでしまえば終わってしまうよね。でも、片方が死んでもね 愛が終わらない方法もあるんだよ」

相手が死んでも、終わらない？ 本当に、そんな方法があるのだろうか。

でも、終わらないということが、恐ろしくも感じた。

好奇心と怯えをない交ぜにした表情を私がしていたのだろうか。

彼は私を見てクスリと笑うと、抱く腕の力を、強めた。

「それって、どんな方法なの……？」

私は、知りたかった。彼のことを、とても強く愛していたから。

彼が死ぬというのなら、私は死んでみせるだろう。

何の迷いも躊躇いもせずに、一瞬で。

「終わらないというよりは、ずっと一緒にいられるって感じかな」

彼は、なかなかその方法を教えてくれなかった。

焦らすように、近いような遠いような、そんな言葉を繰り返すばかりだった。

ずっと、彼と一緒にいられるのだろうか。

私は、こんなことを思っていた。

恋人という関係のままであり続けたら、どうなのだろうと。

年をとって、大人になっても、ずうっとそのまま。

結婚もしなければ、入籍もしないし、子供も産まない。

そうすれば、ずっと愛していられるのではないかと。

好きな感情を持ったまま、死んで、墓に入って。

それでも、相手のことを思い続ける。

恋という想いが、告白という手段によって成就してしまうから……

愛は完結してしまうのじゃないかと思っていた。

叶わなければ、維持することができると。

今の私から見れば、酷く滑稽で愚かしい考えだったのだけれど。

私はその方法が知りたくて、彼にじゃれついてみた。

普段、私から甘えることはほとんどないから、効果があるかと思って。

彼の腕に、猫のように体を摺り寄せてみたり。

綺麗な形の唇に、ついばむようなキスを試してみたり。

くすぐったそうにしながら、彼は教えてくれた。

「君は、カニバリズムって知ってるかい」

カニバリズム？ 何処かで聞いたことがあるような気がした。

そうだ、確か、昔見た本に書いてあったような、覚えがある。

人の肉を、食らうこと——

「ええと、人の肉を食べること？」

「そう。よく知っていたね」

先ほどよりも、彼の笑顔は輝き始めた。

「この行為にはね、いくつかの理由があるんだよ」

そうやって、彼は教えてくれた。

ひとつ。

大きな事故があったとしよう。場所は寒い雪山だ。
食料はなくて、仲間はどんどん死んでいく。
食べられるといえば、目の前の仲間の死体だけ。
これは、食べざるを得ない状況ということ。

ふたつ。

昔からいる民族や、宗教的儀式。
儀式の一例として、赤子の肉を食べたりする。
食べなければ、神様の洗礼が受けられない場合もある。
これは、宗教による理由だね。

みっつ。

とても強い人がいたとしよう。
昔はね、その人の肉を食べれば、自分の力になるといわれていたんだ。
これは、欲深いよね。欲しいから食べちゃうんだもの。

よっつ

ただ単に、人の肉が好きだから、食べる場合。
よく考えれば、たんぱく質とか栄養は豊富だからね。
これは、一番単純な理由だね。

私は、彼の話聞いて、とても不思議な気分になった。
話では、私達人間……ホモサピエンスも、昔は人の肉を食べていたということ。
なら、カニバリズムというものは、とても自然な行為なのではないのだろうか。
それなのに、何故嫌っているのだろうか。
私にはよくわからなかった。
獣だって、共食いをしたりするのに。何故人は嫌うのだろうか。
これも、人間の知能が発達しすぎたせいなのだろうか。
話を聞くまでは、食人行為が異常な事に思えていたけれど……
彼の為なら、出来るかもしれないと思い始めていた。

「ずっと一緒にいられるのと、どう繋がるの？」

「わからないかな？ 考え方は三つ目に近いよ」

彼が話してくれた、例え話。

三つ目は——相手の力を欲しがる話。

相手が、自分のものになるということ。それは——

「だから、僕を食べて？」

私は一瞬、頭の中が真っ白になった。

彼が、今言ったことが信じられなかったから。

「ねえ……今なんていったの？」

「だから、僕が死んだら、食べてって言ったんだよ」

分かっている。彼のいった言葉は、しっかりと聞こえていた。

ただ、頭が吐嗟には理解できなかつただけなのだ。

彼を、食べる。

それは、確かに一緒になれるのかもしれない。

けれど、同時に彼が死んでしまうということにもなる。

「君が僕を食べてくれれば、僕は一緒にいられるんだ。

僕がいなくなって、君が死んでも……ね」

僕を形づくる、血が、骨が、肉が、すべて君になるんだ。

君の中で、僕は生き続けることができるんだ。

君を、愛しているままに。

そう、彼は恍惚と語ってくれた。

私は、正直にいうと、迷っていた。

ずっと、一緒にいたいのは確か。

でも、彼に二度と会えないのは淋しい。

ぐるぐると回る思いは、屁理屈ばかり。

一番、大事なことは。

彼を愛しているということ。

それさえあれば、他には何もいらぬのかもしれない。

彼を食べて、私達の愛は完結する。そして、完結して、また始まるのだ。私の……中で。

私は——覚悟を決めた。

「ええ。わかったわ。食べても、いい」

恐らくその時の私は余程ひどい顔をしていたのだろう。

彼は誤魔化すように言った。

「別に、今すぐなんて言わないよ。僕も痛いのは嫌だからね。僕が、死んだらでいいよ。

そう、遠くはないはずだから」

にっこりと微笑みながら、そう告げた彼の顔は。

とても青白くて、美しかった。

そして、彼は今私の目の前に横たわっている。

冷たく、固くなった姿で。

私が彼の部屋にいつものように来ると、彼は既に死んでいた。

彼の亡骸を膝の上に乗せてみる。

そっと頬に触れてみても、柔らかな温もりは、もうなかった。

風をこじらせたのか、元から病気だったのか。

どんな理由なのか、まったく分からなかった。
分かっていることは、ただ一つきり。
彼が死んでしまったということだけ。
不思議と、悲しくはならなかった。
でも、からっぽな気持ちで埋め尽くされていた。
誰か一人がいなくなってしまうだけで、こんなにも虚しいなんて。
世の中の人すべてが消えてしまったら、一体どうなってしまうのだろう。
どうでもいいことが、気になって仕方がなかった。
ただ、彼の亡骸をじっと見つめていた。

彼の髪を撫でながら、頭の中にポツリと浮かんだ言葉。

『僕が死んだら、食べてよ』

そうだ。私は、彼と約束したじゃないか。
彼が死んだら、食べてあげると。
そして、ずっと一緒にいようと。
なら、私は呆けている場合じゃないと思って。
彼の唇に、思い切ってキスをした。
そして、キスをした後、唇を噛み切った。
口の中に、甘いような苦いような血の味が広がった。
頭の中には、ひとつだけ。
彼を、食べなくてはいけない。でないと、彼と離れ離れになってしまう。
顔の方から、順番に食べていった。
目玉を抉り取って、コリコリと噛み締めて。
舌を食い千切って、柔らかさに驚いて。
首の血管をちぎると、大量の血液が噴出した。
体は冷たかったのに、血液はまだ少しだけ、温度が感じられた。
ひたすら肉を食い千切り、咀嚼して、飲み込んで。
ひたむきに願うことは。
どうか、彼と一緒にいられますように。
ただ、それだけだった。
私が、彼のすべてを食べ尽くしてあげるから。
形なんか、命なんかなくてもいいから。
彼がいたという証は、私の中に残っているから。
記憶なんてやがて薄れてしまうけれど、この事実は消えない。
私が、彼を食べたという事実は。

少し体が重くなったと感じて、彼の体を見てみた。

所々に肉片がこびりついているけれど、ほとんどが骨だけだった。

内臓も、肝臓の辺りまでは食べた。 まだ、腸などが残っている。

それに、後で脳も食べなくちゃいけないわ。

彼の記憶も、私の中に残さなくてはいけないから。

こんなつまらない世界に、彼を一つたりとも残していけない。

白い部屋は、いつしか真っ赤に染まっていた。

ふと私は思った。

私は、狂っているのだろうか――

一般的な常識から考えれば、死体を食べるなんて異常行動にしかならない。

つまり、私はたぶん狂っているのだろう。

だけど、そんな常識に何の意味があるのだろうか。

私は、そんな薄っぺらなものなんていらないから。

私は彼を愛している。

ただ、その真実だけが、私にとっては意味のあることなのだから。

それだけで、何だって私はできる。

このまま……彼と一緒にそのまま死んでしまおうか。

そんなことも刹那考えたけれど、すぐに考え直した。

いくら彼と一緒にいられても、それじゃあつまらないから。

「ずうっと、一緒にいるわ」

彼の亡骸に、言葉を手向けて。

私が、彼を食べることに専念することにした。

けれど、赤い血よりも、もっと気になるものがあった。

私が噛み千切った、無数の傷口。

何故か、それが気になって仕方がなかった。

ああ、もう傷口しか見えない。

「雨が強くなってきましたねえ」

ハンドルを握りながら、窓の外を見て年老いた運転手はそういった。

その言葉につられて、私の窓の外へと視線を向ける。確かに、乗り込んだときよりも強くなっていた。

「本当ですね。こういう日は、お仕事大変でしょう？」

私はタクシーの運転手へとそう話かけた。

仕事が遅くなってしまい、おまけに雨まで降りだした時は憂鬱な気分になってしまったが、こうしてタクシーを拾うことができたから、運がよかったのかもしれない。

「そりゃあねえ……びしょ濡れで入ってくるお客さんもいますし、酔っ払ってる方もいますからね。

うっかり戻しちゃったりしたら、後が大変ですよ。おっと、失礼」

陽気に話す運転手は、いい印象を受けた。むっつりと黙って運転する人よりも、こうして話かけてきてくれるような運転手の方が、乗っているこちらにも気楽になれる

ましてや、週末の残業明けはくたびれているもの。仕事に集中していたから、無性に誰かと話したくなる。

「大丈夫ですよ。仕事、どれくらいされているんですか？」

「もうずいぶんと長いことやってるよ。どれくらいかなんて忘れちゃったけどねえ」

そういうと運転手は、車を走らせることに集中しはじめた。

雨のせいで普段よりも暗い中を、車が静かに走っていく。すれ違う車の数は少なく、眩しいくらいのライトが通り過ぎてゆく。坂道をくだっていくような、緩やかな感覚があった。

家につくまではまだ少し時間があるだろう。

仕事疲れと暗さのせいで、私はだんだんと眠くなってきていた。少しぐらいなら……平気だろう。

そう思い、私はゆっくりとまぶたを閉じた。

「お客さん、お客さん。ちょっと起きてくださいな」

私に呼びかける運転手の声で、意識がはっきりとした。

さきほど目をつぶってから、どれくらいの時間がたったのかわからない。もしかしたら、数分しかたっていないのかもしれない。

まばたきをしながら、運転手へと返事をした。

「悪いね……うっかり眠ってしまった。どうしたんですか？」

「それがねえ、どうも交通事故があったみたいでねえ。見てくださいよ」

そういう運転手の言葉につられて、フロントガラスから路上をみた。

救急車やパトカーなどが集まっていて、通行止めになっていた。

ずいぶんと派手な事故だったようで、ぐしゃぐしゃになっている二台の車を見ることができた

。

雨に流されてしまったのが、血痕などを見ることはできなかったが。

何にしても、このまま道を通ることはできなさそうだった。すぐに通行が復活するとも思えない。

「こりゃあ、迂回するしかないでしょうねえ。それでいいですかい？」

「ああ。それで頼むよ」

わかりました、といい運転手は車を走らせた。迂回するから、普段よりも遅くなるだろうと思った。

家にいる妻に連絡しておこうと思ったが、携帯の電波が珍しく圏外になっていた。

仕方なく諦めた私は、窓の外を眺めることにした。うたたねしたせいか、眠気は去っていた。

何故か私は、さっきの事故にあった人は大丈夫だろうか、などと考えていた。他人事だというのに。

気のせいかもしれないが、最近よく交通事故を見かけることが多い。ただの偶然なのだろうが

。

「最近、交通事故が多いですね。余所見でもしてるんでしょうか」

いきなりな私の話にも、年老いた運転手は返してくれた。

「若い者はしっかり運転しないですからねえ。そればかりじゃあないでしょうけれど。まあ、思うに寂しいんじゃないですかねえ」

「寂しい……誰がですか？」

「事故でなくなった人とかですよ。自分だけじゃ寂しいから、呼んじまってるんじゃないかとねえ」

この世を去ったものが、孤独を嫌って、誰かを招く。

それはとんでもない話のようでいて、どこか納得ができそうだと私は思った。

どことなく、老運転手は寂しそうな雰囲気漂わせていた。

「そういう人も、いるのでしょうか……」

「さあねえ。ただのおじさんの戯言ですよ、お客さん」

そういうと運転手は、顔をくるりはこちらへと向けた。

前を見なくていいのかと一瞬ヒヤリとしたが、一応道は見ているようだった。

「そうだ、お客さん。アメは好きですか？」

アメ、という言葉聞いて、なんのことだろう、と少し考えてしまった。

今外は雨が降っているけれど……私は別に雨は好きではない。

私が答えるより先に、運転手は言葉を続けた。

「いっつもねえ、アメは持ち歩くようにしてるんですよ。小さいお子さんとかも多いですしねえ。あげると、にこにこ笑ってくれますからねえ。で、アメは好きかい？」

その言葉で、私はお菓子のアメだということに気が付いた。

私はあまり甘いものは好きではないのだから、妻はよく好んで食べている。

「ええ。それなりには好きですよ」

「そうかいそうかい。それじゃあ、お客さんにもあげましょうねえ」

嬉しそうに微笑みながら、運転手は片手で私に包まれたアメを一粒渡してくれた。

その顔は、孫や小さな子に優しくしてあげるおじいちゃんそのものといった感じだった。

「どうも。これは苳味ですか？」

透明なセロファン越しに見えるアメの色は、鮮やかな赤色をしていた。大抵は、苳味だろう。

「それは食べてみてからの楽しみですよ」

以前として老運転手はにこにこしている。よっぽど機嫌がよくなったのだろう。

「ああよかった。お客さんによっては、受け取ってもらえなかったりしますからねえ。

そういうときなんかは、後でとっても悲しくなったりするんでねえ」

「それはよかった」

相変わらず、雨は降り続いていて。家まではもう少し時間がかかりそうだったけれど。

人のいい運転手のおかげで、私は退屈しないで済みそうだったと思った。

その後も、私は家につくまで運転手と話を続けていた――

次の日。私は休日を家でゆっくりと過ごしていた。

家とはいっても、マンションの一部屋でしかないのだけれど。

リビングからは、妻が食器を洗っている音が聞こえた。それに混じって洗濯機の回る音も。

こういう音を聞くと、なぜかはわからないが落ち着いてしまう。

先日運転手にもらったアメは、昨日の夜にテーブルの上に置いておいた。

妻は寝ていたなので、起こすのも忍びないと思ったからだ。

甘党な妻のこと。きっと包みをとって、口に放り込んだ後だろう。

私はというと、自室で読みかけの本を読んでいた。

妻を手伝おうかと思ったのだが、てきぱきとこなしてしまうので、必要がないのだ。

お気に入りのピンクのエプロンをしながら、実に楽しそうに彼女は家事をこなしてくれる。

そうしてしばらく本を読んでいると、妻のノックが部屋のドアを叩いた。

「わたし、洗濯物干してるからね」

「わかった。よろしく」

ドアを開けることはせずに、声だけがドア越しに聞こえた。

私たちはいつもこんなようなものなのだ。べたべたしているわけでもないが、さめきってもいない。

つかずはなれずのこの場所が、心地いい。

洗濯物は妻に任せて、私は本を読みすすめた。

そう薄くはない本だったが、読みかけということもあって、早く読み終えてしまった。

本を棚へと戻してから、私はリビングへと向かった。

集中している間は気づかなかったが、ひどく喉が渴いていた。

部屋を閉め切っていたせいで、空気が乾燥してしまったのだろうか。

冷蔵庫を開けて、一番上の棚においてある缶ビールの開けるといい音がした。

昼間からどうどうと飲酒できるのも、休日のいいところだろう。

ゆっくりと酒を飲んでしていると、救急車のサイレンの音が聞こえた。かなり近くから聞こえる。

しかもだんだんと音が大きくなっていることから、こちらの方面へ向かってきているようだ。

ベランダを見ると、妻の姿は見えずに、洗濯物だけがひらひらと風に揺れていた。

自室にでも戻ったのだろうか。

おおかた、交通事故だとか、車が突っ込んだとかそのあたりだろう。

サイレンの音はなおも近づいてきている。そしてマンションの前あたりで音は止まった。

誰か怪我でもしたのだろうか？

普通は見ないほうがいいのだろうが、気になってしまってベランダから下をのぞいた。

救急車はマンションのまん前に止まっていて、担架を下ろしているところだった。

救急車から視線を真下へと映して、私は凍りついた。今見たものが信じられなかったのだ。

ベランダを足早に出て、妻の自室をロックした。……返事も、物音も聞こえなかった。

背中を嫌な汗が伝い落ちて気持ち悪い。

急激なめまいでふらふらとしながらも、再びベランダへと戻り、下を見た。

壊れてしまった人形のように、折れ曲がってしまった手足。無造作に散らばる黒い髪。

見覚えのあるピンクは、にじみ広がる赤のせいで変色していた。

顔までは見えない。見えなくても、あれが誰なのかは解る。

救急隊員が担架に乗せて、妻を運んでいく。

マンションの3階から落ちて、助かるとは思えない。

あわただしく救急車が去り、その場には赤い血溜まりが残された。

呆然と見つめる私の視界に、ひときわ鮮やかに何かが目に映った。

それは、老運転手にもらった飴玉に似ていた。

どうしようもない虚無に支配されて、私はへなへたとベランダに座り込んだ。

一人取り残された私の耳に、玄関をロックする音が聞こえた。

この日、俺は町でぶらぶらと暇をもてあましていた。

メールチェックなどをしてみたが、誰からも何の連絡もなく。

買い物をしようかとも思ったが、特に必要なものもなく。

掲示板を覗いてみても、興味のない書き込みばかりで。

遊びにでもいかないかと何人かの友人に連絡したが、返事がないままだった。

だからといって、町を歩く人をナンパしてみるほど度胸もない俺。

「何か面白いことでもねーかな……」

こういうとき、かわいい女の子にでも話しかけられればいいのに。逆ナンみたいな感じでさ。

そんな俺の小さな願いは叶うはずもなく。俺の周りに集まってきたのは、数人の男たちだった

。

俺はそいつらの顔を見てみたが、見覚えはない。ただ単に俺が忘れていただけかもなかったが。

「何……俺になんか用でもあんのか？」

ほんの少しの警戒を含ませてかけた問いに返ってきた返事は。

「お前さ、ケイ？」

「Kっていったい何のことだ……と馬鹿みたいに一瞬考えてから、それは俺の名前だということに気が付いた。

自分の名前なんて普段意識していないから、なんだかわからなかったというわけだ。

「そうだけど……あんた誰？」

「おいおい——忘れたとはいわせないぞ？ ほら、オレだよオレ。カズヤだよ」

頭の中にある記憶と、今目の前にいるカズヤという名前と外見を照らし合わせてみる。

数秒後、俺の中で思い出したことがあった。たしか、ずいぶん前に知り合ったやつのような気がする。

そのときのカズヤは、もっと弱弱しい外見だった気がするんだが。

今目の前にいる男は、がっしりとしていて、随分と強そうに見える。

「ああ——お前か！ 随分と久しぶりだな。最近全然あってなかったじゃん」

「お前の噂聞いたから、ちょっと出てきたんだよ」

「ふーん。それで、他の人たちは誰？」

「やっぱり覚えてないんだな……ユウジと、キョウヤと、シュンだよ」

再び記憶と照らし合わせてみるが、さっぱり覚えがない。なんというか、よくある名前かわからねえ。

過去にあったことはあるのかもしれないが、あまり仲がいいわけではなかったんじゃないだろうか。

男友達なんて、そんなもんだろ？

「うっかりしてただけだって。この俺様がダチのこと忘れるはずないじゃんか。で、用あんの？」

相変わらずだな、とケンジがぼやいていたが俺は見ない振りをした。

「まあ、用っていうほどのことじゃないんだけどな。ケンカしにきただけさ」

「ケンカあ？ おいおい、俺一人にお前達かよ。随分と卑怯じゃねえか」

「卑怯？ お前がいえる立場じゃないだろうに。こっちはずいぶんとストレスが溜まってんだよ」

カズヤと話している間にも、後の二人に俺は囲まれていた。

「で……殴り合いでもするわけ？ それなら大歓迎だけど」

俺がそういうと、近くにいるシュンってやつが鼻で笑いやがった。

「殴り合いなんかじゃ、おれの気は済まない……」

少しイラついている様子のキョウヤがそういった。

「あいつらもそういってるからさ……殺させてもらう」

そういうなり男たちは、腰元から剣を抜いて、俺に突きつけた。

「おいおいっ……マジかよ！？」

だいたい街中で剣だすとか禁止だろ！？

そんなことを考えているうちに、ケンジの後ろで銃を構えているユウジが見えて、俺は慌てて駆け出した。

できうる限りの全速力で街から、男達から俺は逃げる。

いきなり刃物を振り回すなんて、正気じゃない。これから殺すなんて宣言も。

でも、少し楽しいと思っている俺も……イカれてるけどな。

にやりと口元を歪めながらも、俺は走り続ける。

俺は町から離れて、林へと逃げ込む。少しはまけたかと思ったが、相変わらず銃撃は続いていた。

「前から、一回人殺したかったんだよなあ！！」

物騒なセリフと共に、カズヤが切り込んできて、俺はぎりぎりで避けた。

追われるのは嫌いじゃないが、今の俺は丸腰だ。どうみたって勝てやしない。

避けた勢いで、俺は木の根に引っかかって転んでしまった。

数メートル転がった俺が立ち上がろうとすると、すぐ側に剣が突きたてられた。

「チェックメイト、だな……ケイ？」

そういいながら俺を見下ろすカズヤの顔には笑みが刻まれていて。

見ているだけで、いらいらしてくる。

二つの剣と、一つの銃が俺に狙いを定めていた。

「あー。ここで思いとどまったり……しないよなあ」

カズヤへ向けてというより、俺自身に向けてのボヤキ。

「当たり前だろ」

そして、嫌な音と共に俺の視界は暗転した――

暗転するときの残像が目に残って、チカチカした。

舌打ちをしながら俺はディスプレイをつけなおして、キーボードへと指を走らせた。

たったいま、俺を殺したばかりのやつらへと向けて。

『まったく……本当に殺してくれやがって』

メッセージを飛ばすと、カズヤからすぐに返事が返ってきた。

『元はといえば、お前が悪いんだから自業自得だろ』

『いったい俺が何したってんだよ？』

『お前なあ……やっぱり変わってないな。散々オレのアイテムやら何やら持ってっておいて』

『ああ？ アレはお前から借りただけだろう』

『借りたら返すのが常識だろうが、アホ。最近見ないと思ってたのにな。キョウヤ達から相談されてな』

まったく覚えていないが、どうやらあの男達から色々と盗んでいたらしい。

同じようなことを何度も繰り返してるから、覚えているはずがない。俺にとっては皆同じカモなんだから。

『だいたい、キャラ何か作っては消しだからいちいち覚えてないんだって』

『根っからの詐欺師みたいだよな、お前』

『悪かったなあ。俺はこういう奴なんだよ。で、カズヤはどうなんだよ感想』

『ん……ああ、PKの感想か。そうだな……お前に限ってなら、すかっとするかもしれないな』

『うっわ、この人殺し。サイテーなやつめ』

『お前にいわれたくはないって、この殺人鬼め。今までにいったい何人殺した？』

『さあ、な。覚えていられないくらい、たくさんってことだけは確かだぜ』

『そういえば……キョウヤ達も喜んでた。やっと憂さ晴らしができたって』

『まったく今日はまんまとやられたからな……今度やりかえしてやるって言っとけ』

『いつまでたっても終わんなさそうだな……リアルでは、殺したりするなよ？』

『わかってるって。ってか、これって人殺しになんのかな』

『さあ……オレもさっきお前のこと殺したからなあ……何ともいえない。確かなのは』

『——イカレてる』

まったく同じ文字が画面に浮かび上がって、俺は苦笑した。

その後しばらく話をしてから、俺はPCの電源を切りディスプレイを外した。

ネットだろうがリアルだろうが……どちらにせよ俺はきっと人殺しさ——